

南雲泰輔著

『ローマ帝国の東西分裂』

井上文則

ローマ帝国は、いつ東西に分裂したのか、また分裂の内実はどうのようなものであったのか、そしてその歴史的意义はいったいどこにあったのか。本書が解き明かそうとするのは、これらの問題である。著者の南雲泰輔氏は山口大学の人文学部講師で、その落ち着いた文体から受ける印象とは異なり、実は若手の研究者であり、本書は二〇一一年に京都大学に提出された博士論文が下になっている。まずは、本書の構成を以下に示そう。

序章—本書の課題

第一章 問題の所在—ローマ帝国の東西分裂をめぐって

第二章 シュンマクス—「永遠の都」ローマ市と食料供給

第三章 ルフィヌス—新しい「首都」コンスタンティノー

ブル市の官僚の姿

第四章 ルキアヌス—帝国東部宮廷における官僚の権力基

盤

第五章 エウトロピウス—帝国東部宮廷における宦官権力

の確立

第六章 ステイリコ—帝国西部宮廷における「蛮族」の武

官と皇帝家の論理

第七章 アラリック—イリュリクム道の分割と帝国の分裂

終章—ローマ帝国の東西分裂とは何か

この整然とした章構成から明らかのように、本書は、ローマ帝国の文武の官僚に焦点を当てながら、東西分裂の問題を考察している。文武の官僚に焦点が当てられるのは、この時期の帝国統治の鍵が、「専制君主」とされる皇帝ではなく、皇帝を「専制君主」とらしめていた官僚制にあったとする著者独自の認識に基づいている。なお以下で、評者はまず各章ごとの内容紹介と疑問点を提示し、その上で全体に関わる問題を最後に議論することにした。序章で著者は『オックスフォード古典学事典』、『オックスフォード・ビザンツ事典』の東西分裂に関する項目の紹介、検討を通して、教科書的な知識に照らせば自明とも思われる三九五年の東西分裂が、実はその年代、内実、そして歴史的意义のいずれの点においても現在の学界では「甚だ不明瞭な出来事」として捉えられていることを示す。

続く第一章では、現在の状況に至るまでの研究史が二〇世紀を中心に丁寧に跡付けられる。著者は、一九五一年に刊行されたE・ドゥムージョの『ローマ帝国の統一から分裂へ（三九五―四一〇年）』を研究史上の分水嶺とみなす。二〇世紀前半の研究は、「東西分裂の歴史的意义を、否定するにせよ肯定するにせよ」、「無視しえぬ出来事」としており、ドゥムージョの研究はその集大成

となつたわけであるが、しかしA・H・M・ジョーンズが六〇年代に東西分裂の歴史的意義の過大評価を戒め、さらに一九七〇年代以後の「古代末期」研究の隆盛に伴つて、その研究そのものが等閑に付されるようになっていった事情が語られる。なおドゥム・ジョ以前の研究としては、K・ザクジェフスキの『テオドシウス派とその対立』とS・マツアリーの『ステイリコ』が、東西分裂期の帝国を官僚や武官に着目して分析したことを理由に高く評価され、以後の研究としては、J・H・W・G・リーベシユツとA・キャメロンの研究に注意が向けられている。本章では、このような研究史の把握に基づき、さらに各章で取り上げられることになる問題が具体的に提示されている。

第二章「シユンマクス」から本論に入る。本章では、帝政後期におけるローマ市の政治的・行政的位置の解明が目指される。解明の手がかりとされるのは、ローマ市への食糧供給の問題であり、とりわけ三八四年に発生した食糧危機とこれに直面したローマ市長官であった元老院貴族シユンマクスの対応である。著者は、シユンマクスの残した『陳述書』の分析を通して、ローマ市が独力でこの食糧危機に対処できず、メディオラヌムの宮廷に解決を頼らざるを得なかったことを読み取り、ここからローマ市がもはや帝国の経済的中心ではなくなつていたと結論する。また食糧危機に際して、シユンマクスが外国人をローマ市外に退去させた事例を取り上げ、元老院が排他的・閉鎖的性格を強めていったと指摘する。加えて、元老院は、メディオラヌムの宮廷を中心とする統治構造にも部分的にしか取り込まれず、またそこで実権を握っていた武官とも婚姻関係などを通して結びつかなかつたために、

ローマ市は政治的にも帝国の中心たる性格を失つていったと論じる。確かに、著者が説くように、ローマ市が帝政後期においてもはや帝国の政治的・経済的中心ではなくなつていたことは疑いなくであろう。しかし、経済的中心でなくなつていたと考える根拠には疑念を呈さざるを得ない。著者はその根拠として、ローマ市が独力では食糧危機を解決できず、宮廷に頼り、結局は食糧供給地であった北アフリカの担当官への宮廷からの圧力で解決されたことを挙げているが、そうであれば問題の本質はローマ市の経済的位置の低下ではなく、政治的位置の低下に帰着するのではないだろうか。

第三章で、著者は四世紀末を代表する官僚ルフィヌスを取り上げ、このルフィヌスの像が四世紀末から六世紀にかけてどのように変化していったのかを考察することを通して、官僚制に対する帝国民の認識の変化をも探ろうとする。この期間、ルフィヌスは一貫して「佞臣」として描かれるが、四、五世紀と六世紀では描かれ方が質的に異なるとされる。すなわち、前者の時期の史料はルフィヌスの悪行を彼個人の罪過として記述するが、後者の時期になると、ルフィヌスの悪行は、彼を取り上げたそれぞれの著作家の関心に従つて、個人を超えた形で歴史的に位置付けられるようになるのである。そして著者は、以上のようなルフィヌス像の変化から、制度に優越した政治家的官僚から制度に従属する官僚へと帝国民の官僚制に対する認識が変化したことを読み取っている。精緻な史料分析から導き出されるルフィヌス像の変遷については説得力があったが、その変化の原因は、ルフィヌスが歴史的人物と化していった結果に過ぎないように思われた。そもそもル

フィヌスという官僚個人に対する認識が、官僚制という制度に対する認識と同じであることについても疑問が残った。

第四章「ルキアヌス」は、第三章の内容と密接に関連している。この章ではルフィヌスによるルキアヌス処刑事件―ルキアヌスは、ルフィヌスへ賄賂を贈ってオリエンヌス管区総監職を得ていたが、アルカデウス帝の大叔父エウケリウスによって皇帝に讒言された―要求をはねつけたため、エウケリウスによって皇帝に讒言された。この讒言を受けた皇帝によって責任を問われたルフィヌスは、アンテオキアにいたルキアヌスを急ぎ処刑した―が考察の対象となる。著者はこの事件の分析を通して、四世紀後半の官僚の権力基盤を明らかにする。先行研究はこの事件の分析から、官僚の権力基盤がパトロネジにあつたとしてきたが、著者はパトロネジ説を実証的に否定し、新たにそれが個人的資質、より具体的に言えば、「官僚としての実務能力、遵法精神」にあつたと主張する。そして、ここに「パトロネジに依存しない新しい統治構造が立ち現れてきた」とするのである。この章の問題として評者が気にかかったのは、ルキアヌスの処刑事件の復元である。著者によれば、ルフィヌスは、ルキアヌスのあまりに厳格な統治に常々不安を抱いていたため―なぜならこのことはアンテオキアでの暴動を引き起こす恐れがあり、都市暴動にルフィヌスは以前から頭を悩ませていた―、ルキアヌスを排除する機会を狙っており、エウケリウスの一件が起こったことを好機としてルキアヌスを処刑したというものであつた。しかし、この事件を伝えるゾシモスによれば、むしろルキアヌスの処刑がアンテオキアの人々を憤慨させたとあり、結果は逆効果になつているのである。そも

そもルキアヌスの統治は、著者が指摘するように都市参事会員に厳格であつたのであるから、民衆には好感をもたれていたのではないかとするならば、ルキアヌスの統治がアンテオキアの暴動を引き起こす可能性があつたことに、彼の処刑の根本的な原因と見るのには無理があるように思われるのである。

第五章は、ルフィヌスに代わつて東方で権力を握つた宦官エウトロピウスが考察の俎上に上る。「スーダ」は、エウトロピウスの時代に宦官の勢力が大きな発展を遂げたと伝えているが、著者はこのような事態がなぜ起こつたのかをエウトロピウスの行った行政改革の分析から解明している。最も重要な行政改革と目されるのは、エウトロピウスが道長官の権限であつた公共輸送制度利用に際しての旅行許可書の発給権限を宦房長官に移したことである。帝国財政を司る国庫管理総監と帝室財産管理官は、この制度を利用して物品を輸送していたため、彼らはいちいち宦房長官に旅行許可書を求めねばならなくなつた。結果として、エウトロピウスの改革によって宦房長官は財政上の影響力を獲得したことになつたとされる。また同時期には、カッパドキア方面帝室領が帝室財産管理官の下から宦房長官の下へと移つていくことにも著者は着目する。こうして宦房長官へと重要な財政上の権限が移つたわけであるが、当時の宦房長官はホシウスというエウトロピウスの息のかかつた人物であつた。したがつて、エウトロピウスは、「帝国東部の財政業務に関するあらゆる権限を帝室領の管理とともに一手に掌握するようになった」のであり、「宦官として高位に進みさえすれば、帝国の莫大な富への近接機会を得られるであろうことを広く世に知らしめ」、これによって宦官志望者の増大

が招来されたと結論付けるのである。言葉尻は捉えたくはないが、エウトロピウスが、その改革によって「財政上のあらゆる権限」を掌握したというのは言い過ぎではないだろうか。そもそもその掌握の仕方自体が、息のかかった人間を介しての影響力行使に過ぎず、制度上の権限を手にはしているわけではないので、極めて不安定なものであったと言わねばならない。その上、当の宦房長官のホシウスが元奴隸であったということは、宦官にならなくとも、制度的に帝国の財政を掌握できたことになり、さらに言えばエウトロピウス自身やがて処刑されてしまうことを思えば、エウトロピウスの行政改革が宦官志望者を増加させる結果に必ずしも繋がったとも思われない。

第六章から目は帝国西部に向けられる。東西分裂期に西方で権力を握ったのは、「蛮族」出身の武官ステイリコであったが、このステイリコは皇帝ホノリウスに自らの娘二人を嫁がせている。著者は、「蛮族」であったステイリコがいかなる論理でもって皇帝家と結びつき、しかし最終的には破滅したのかを主にクラウディアヌスの作品の分析を通して考察する。考察の結果、ステイリコは、「血」の論理で成り立つ皇帝家（「サンガイス」の論理）と自身を「パテル（父親）の論理」でもって調和させたが、やがて「蛮族」が絡む政治的、社会的状況の変化が生じると、「父親」は「蛮族」と結び付けられ、この蛮族的な「父親」が皇帝家の「血」と衝突することで、「蛮族」ステイリコの処刑に至ったとされるのである。ステイリコの抱いた論理とその破綻が描かれていて興味深い、あまりに思弁的であり、事件史との関係性ももう少し意識されてもよかつたのではないか。例えば、四〇八年に

アルカダイウスの死をめぐる対応の中で「パテル」の論理と「サンガイス」の論理が対立した結果、ステイリコの処刑に至ったとされるが、通常、ステイリコの処刑は、文官オリュンピウスの策謀の結果とされており、このような具体的な事件史と二つの論理の対立という問題が、どのように関わってくるのか論じてもらいたかつた。また「蛮族」は、「蛮族」という属性を隠す必要があつたとされるが、その必要があつたことが論証されていない点にも疑問を感じた。

第七章は、これまでの章を踏まえて、東西分裂の問題が真正面から扱われる。著者はこの問題を具体的にイリュリウム地方に引かれた東西の境界線の画定問題と捉え、これがいつ、どのような経緯で起こつたのかを明らかにしようとする。東西分裂の時期として現在でも検討に値するのは、三六四年と三九五年であるが、著者はいずれの時期においても東西の境界線という点では変化が生じていない、すなわち行政区分としてのイリュリウム道の一体性は損なわれていないことを確認する。その上で、三九五年以後のバルカン半島情勢に目を転じた著者は、アラリックによる反乱とそれに伴った東西宮廷の対立によって、バルカン半島中央部において「真空地帯」が発生していたことを指摘する。そして、この「真空地帯」解消のためにエウトロピウスがとつたアラリックをイリュリウム方面軍司令長官に任じるという処置が、結果的には「真空地帯」の解消ではなく、ローマ帝国の東西の「要」であったイリュリクムの支配権喪失へと至ってしまったと論じる。そして、このように考えるならば、アラリックにイリュリウム方面軍司令長官の職が与えられた三九九年を東西分裂の年として位置

づけることが可能であるとの主張が行われるのである。従来、法的・一体的の有無や分担統治の実態という観点から論じられてきた東西分裂の問題を東西の境界線の画定問題と捉えて考察することには著者の優れた着眼点を感じたが、肝心のアラリックが任じられたとされるイリュリウム方面軍司令長官職について気にかかる点があった。この官職が管轄する「イリュリウム」とは、マケドニア管区とダキア管区だけを指しているのだろうか、それとも旧イリュリウム道、すなわちパンノニア管区も含めたものなのだろうか。もちろん著者は、前者の意味でイリュリウム方面軍司令長官と考えているのであろうが、そう考える根拠はどこにあるのだろうか。評者は、註記がなかったためこの点に気がかかり、関係する文献を開いてみたが、そこで気づいたのは実はアラリックがイリュリウム方面軍司令長官に任じられたという事実自体がその年代も含めて推定に過ぎないということであった。年代については三九七年、あるいは三九八年を取る研究者が多いようであったし、アラリックが任じられた官職を「総軍司令官 *magister utriusque militiae*」とする説すらあった^①。著者は、イリュリウム方面軍司令長官へのアラリックの任命に東西分裂の決定的な意味を認めているのであるから、自明の前提とせずに、この役職について議論する必要があるように思われた。

終章では、これまでの章で得られた結論が一貫した歴史叙述の中に再構成される。まず東方では、「新しい「首都」コンスタンティノープル市の宮廷を中心に、官僚や宦官の主導の下、行政機構の整備が進んだ」とされ、特に当該期固有の特徴として皇帝顧問会議（コンシストリウム）を中心として政治が行われたことを

指摘し、「コンシストリウム政治」という呼称を提案する。東方でこのように新しい発展がみられたのに対して、西方は対照的に「衰退のさなか」にあったとされる。ローマ市の元老院は、排他的、閉鎖的になっており、皇帝の滞在したメディアオラムでは「蛮族」の武官が権力を握ったが、彼らは皇帝家と十分な関係を結ぶことはできず、彼らを中心にした新しい体制も結局は出来上がることはなかった。このような状況下で、第七章で論じられたようにイリュリウム道に東西の境界線が引かれ、帝国は分裂するに至ったのである。著者は「ローマ帝国の東西分裂は、皇帝権力の分治や宮廷の分割といった単なる政治的事件であったのではない。それは、ローマ帝国解体以後の展開のあらゆる意味で基礎となる、帝国領域の分断をもたらす出来事であったのである」と結んでいる。

最後に本書全体に関わる問題として評者を感じたことをいくつか述べておきたい。一つは、制度としての官僚制の問題である。本書は、著者が「序章」で断っているように、官僚制を「無数の官僚たちの総体として扱うのではなく、個々の官僚の具体的な様相に迫ることを目的としているが、それでももう少し官僚制度自体について言及すべきであったように思われた。四世紀末には、行政機構の整備が進んだことについては、終章だけでも「帝国東部宮廷の発展」「新しい統治構造」など様々な表現で言及がなされていたが、その具体的な姿がみえなかった。しかし、行政機構の整備の実態が示されなければ、例えばエウトロピウスの時代に宦官の志願者数が増えたことが、「階級」としての宦官の拡大発展であったとされても、志願者の数だけでそう断言するのは説得

力を欠き、やはり志願者の受け皿である宦官のポスト数の増加があったことを示す必要がある。

制度としての官僚制に関係してもう一点、述べておきたいのは、官僚の権力基盤の問題である。官僚の権力基盤は、四世紀末には、第一に「個人的資質」にあったとされていたが、一方で宦官の権力基盤については「官位爵位を与えられて帝国の行政組織のなかに制度的に組み込まれている（二三五頁）」点が、前期ローマ帝国の解放奴隷等との比較で、強調されていた。もともと、この点が宦官の権力の第一義的な基礎として言及されていたわけではないが、宦官の権力の第一義的基礎は、個人的資質よりもこの点にあるように読めるのも事実である。とするならば、なぜ官僚と宦官とは同じく帝国政府に仕えながらも権力基盤が異なるのであるのか。評者には、官僚の権力基盤も、第一にはやはり宦官のようになり「帝国の行政組織のなかに制度的に組み込まれている」ことにあり、個人的資質は、その上で個々の官僚の出世などに必要とされたものに過ぎないように感じられた。個人的資質が後期ローマ帝国期に重要になってきたこと自体を否定するつもりはないが、これを「権力行使の究極的基礎（一九二頁）」とまでするのは行き過ぎではないのか。

以上は概ね東方に関わることであるが、西方についても疑問点を挙げておきたい。それはやはり東方と同様、制度の問題についてであるが、西方では、なぜ「武官政治体制」の構築が阻まれたのか、という点である。この疑問について著者は、元老院と皇帝家が、「旧来のあり方に固執して変革を忌避し、その（武官政治体制の）実現を阻むという時代錯誤な対応しかできなかった（一

九五頁）」ことに原因を求めているが、実際にはその対応としてはステイリコという個人の武官が倒されただけであり、本当に彼らに「武官政治体制」というものの自体の実現を阻む積極的な意図があったのか、疑問を感じた。これと関連して、西方では、あまりにもステイリコのイメージが強いため、東方の文官、宦官の姿との対照が際立つが、しかしステイリコを倒したのが文官のオリユンピウスであったことを考えれば、実際には、西方でも東方的な行政機構が整備されつつあった可能性は排除できないのではないかと。評者には、著者が過度に東西の状況を対比的に捉えているように思われてならなかった。

以上、長々と批判めいた疑問を書き連ねてきたが、それは本書の価値を貶めるものではなく、特に制度としての官僚制のことなどは、むしろ無いものねだりをした感が強く、誤読、誤解も含めて、著者のご寛恕を願う次第である。本書は、東西分裂期という西洋史上で最も複雑で錯綜した時代を、個々の官僚の動態から具体的に一貫して追求し、一つの歴史像を組み上げており、これは欧米にも類を見ないものであり、非常に高く評価できる作品であることは末筆ながら強調しておきたい。著者は、今後も引き続き東西分裂の問題を、それもローマ街道や公共輸送制度の分析というユニークな角度から分析するとしている。著者の研究のさらなる発展に大いに期待したい。

① 三九七年説をとる研究としては、P. Heather, *Goths*, Oxford, 1996, pp. 143-144; M. Kulikowski, *Rome's Gothic Wars*, Cambridge, 2007, p. 167 があり、P. R. E. Atanovs 1 冊「三九九年以前」で、「おそろく三九八年」としている。南川高志「新・ローマ帝国衰亡史」岩波書

店、二〇一三年、一七九頁は三九八年説を取っている。アラリックの官職を総軍司令官とするのは、S. Mitchell, *A History of the Later Roman Empire AD284-641*, Oxford, 2007, p. 92 以下、官職付与の年代は三九九年とする。

(A5版 本文二〇八頁 索引、註等一一五頁 二〇一六年三月)

岩波書店 税別七〇〇円)

(早稲田大学文学学術院教授)